

毎日が、散歩の途中

夏は自然のなかで

文と絵 岡本杏子



杏

四季の中では、圧倒的に夏が好きだ。緑濃い木々と青空。青空にぼっかりと浮かぶ白い雲。スイカの緑、黒、赤。夏の色は鮮明でみずみずしい。生まれ月の身びいきから、のどかな春が一番上等で、夏は日射しが強すぎると敬遠してはならない。いつの頃か夏の訪れを焦がれるようになった。

黙っていても長い夏休みが待っていた子供時代と違い、大人になればまとまった休みを取るのは盆暮れだけ。旅の期待が高まって夏を待ち遠しく思うのも自然の流れだろう。

でも、ここ数年で夏への愛着が格段に深まったのはキャンプの楽しみを覚えたことが大きい。四十過ぎてからのアウトドアデビューだから、テントの設置や屋外での煮炊きといったキャンプのイロハは本やネットで「勉強」した。

肉は味噌漬けが日持ちするとか、現地の産直野菜はどこで買えるとか、2回3回と経験を積むにつれて、川で冷やしておいた果物がみずみずしくなる。

キャンプ場の一日は長い。釣り好きの夫は早朝4時ごろからフル装備に着替えてテントを出て行く。狙いはヤマメとイワナだ。娘と私は7時頃ばかりは起きて、薪で火をおこし朝食づくりに取りかかる。コーヒーを淹れたりと、川で冷やしておいた果物を切ったり、のんびりと支度をし、夫を待ちながらのんびりと食べはじめ。

朝食が終わると、娘は「泳いでく」と川に突入。夫はまた釣りへ。私は木陰で本を読んだり、昼寝をしたり、頭の中はすっかり空っぽで、川の音と蝉の声だけが響いている。

昼は遊び優先で昼食は簡単なものだが、釣果次第でヤマメの塩焼にありつけることもある。日が暮れかかると、あちこちのテント周辺から夕支度の煙が立ち始める。一瞬、縄文時代の集落のようになる。日が暮れると一気に闇は深くなり、焚火の炎と月明かりが頼りだ。

自然の偉大さに目が開いた矢先、森や川や魚を放射能汚染から守らなければならない時代になった。

岡本杏子(おかもと きょうこ)
神奈川県生まれ、世田谷区在住のライター。店舗・住宅・人物の取材執筆を得意とする。今までに経験した職は男女さんや真実屋、なすりパイと正社員を含めて20を超える。が、ライター業に落ちるまで、は15年。散歩と読書が生きがみ。愛する、一女の母。

特別寄稿

脱北者

朝日新聞社 牧野愛博

朝日新聞の6月24日付け朝刊でもお伝えした通り、5月24日午後、私はロシア・シベリアで北朝鮮を脱出した元伐採工に会った。

極東に広がるアカマツやカラマツを伐採する仕事は1960年代から90年代にかけて盛んに行われた。北朝鮮からはハバロフスク近くの伐採場などに最大時で2万人規模の伐採工が送り込まれたという。

1995年から10年間にわたって伐採現場で働いたという彼の顔には、49歳だというのに、深い皺が刻まれていた。

最初に食事をして、リラックスしてから話を聴こうと思ひ、食事を勧めた。冷めたスープ、硬いパン、臭みが残るハンバーグ。小さな街の小さなホテルにありがちな不味い昼食だったが、彼は黙々と食べた。食べながら、目は忙しく周囲を伺っている。我々が座ったテーブルに近づくと人間がいると、驚いたような表情を瞬時かへる。

「数年前、こんな場所まで保衛部(北朝鮮の秘密警察の国家安全保衛部)がやって来た。仲間が捕まっていたが、空港で必死に拘束具を解いて逃げた」と話した。「本の仲間がいる。故国から遠く離れ、

国に送還されたら、それは死に至る道だ」とも言う。

伐採現場では、朝8時から夜10時までひたすら木を切り、駅まで運んだという。別の元伐採工の話では、冬には辺り一面雪景色となるため、雪に乱反射した太陽光線が目をもめる者が多かったという。「栄養不足から、1年で全部歯が抜けた」という話も聞いた。

2005年、彼は伐採現場を後にしたまま、戻らなかった。故郷の家族がどうなったかわからない。今はひたすら韓国に行くことだけを考えている。しかし、最低でも生活費に月400ドル(約3万2千円)はかかるという。いつ頃にしたら韓国行きのお金が準備できる、そういったメドも立っていない。

彼には同じ境遇の元伐採工4人、そう言う、雑踏の中に消えていった。

肩を寄せ合って暮らす。「朝鮮の人間は勤勉だし、情もある。でも国際的な威信は全くない。そんな国の国民であることが恥ずかしい」とも話した。

私はこの取材が終われば、数日後には東京に戻る。同じ場所にいる彼は、いつロシアから外に出られるのかわからない。どう慰めて良いのか、うろたえる私に、彼は逆に「まだロシアで取材するんだらう。保衛部の奴らには十分、気を付ける。我々と接触していることがわかれれば、あんたも危険だ」と気遣いさえ見せてくれた。

お土産のタバコ1カートンを渡すと、「仲間と一緒に吸おうよ」と嬉しそうに顔を紅らせた。ホテルの入り口で固く握手をして別れた。「次は東京かソウルで会おう」。彼はそう言う、雑踏の中に消えていった。

町ネタ

東西南北

ちひろ美術館コレクション
ちひろと世界の絵本
画家たち

開催中(8月26日)
損保ジャパン東郷青児美術館(西新宿)
05777-8600(ハローダイヤル)

一般1,000円
日本を代表する絵本画家いわさきちひろ(1918-1974)。ちひろは「何年も読みつづけられる絵本」をつくらうと独自の絵本表現を追求し、生涯で約40冊の絵本を発表しました。その多くは版を重ね続け、今も変わらずたくさんの人に愛され、親から子へ、子から孫へと読み継がれています。

本展では、ちひろ独自のさまざまな絵本の仕事を、原画約25点とアトリエの復元などで紹介します。同時に、世界で最初の絵本美術館であり、世界の優れた絵本美術館の作品を収集している「ちひろ美術館」のコレクションから、赤羽末吉、長新太など馴染み深い日本の絵本画家やアジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカなど25カ国52名の画家による絵本原画を加え、全体で約130点を展示します。世界各国の文化、特徴をあらわす多様な絵本原画の数々をお楽しみください。



いわさきちひろ(日本) ぶどうを持つ少女 1973年

8月26日(日) 17時開場
ディファ有明
セミファイナル



2012年7月1日 ラジャダムナン スタジアムで大勝利!

「未知なる対戦相手に、日頃の鍛錬の成果を爆発させます!!」(志朗談)
チケットのお問合せ・お申込は、志朗後援会事務所まで!

志朗選手のチケットの収益金は、タイのエイズホスピスと小児エイズ施設、ペルーの身体障害者施設、東日本大震災の被災地・岩手県大槌町の子供支援施設・大槌臨学舎に寄付されます。

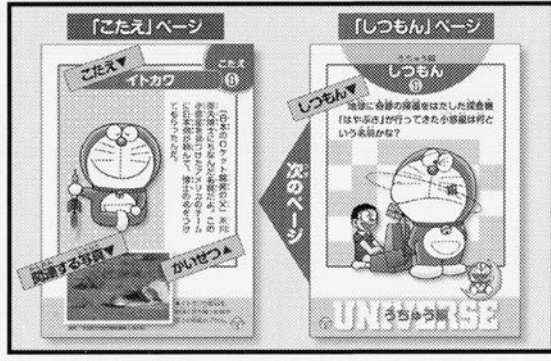
志朗後援会事務所 北区中里2-4-1高野ビル2F ☎03-5974-8278
志朗オフィシャルサイト <http://www.shirou-m.jp/>

対 Jomrachan Tor. Langoa 戦



朝日新聞の大人気連載
「しつもん! ドラえもん」ポケットブック
第2弾 大好評発売中

しつもん! ドラえもん ポケットブック 2
キャラクター原作: 藤子・F・不二雄 (文庫本サイズ 発行: 小学館)



©Fujiko-Pro, Shogakukan



「うちゅう」「けいざい」「りょうり」など18のおもしろテーマで「しつもん」と「こたえ」を一問一答形式で掲載しています。「おしえて! 新聞活用法」のコーナーもあります。

定価600円(税込み)
お求めは ASA 田端・ASA 西ヶ原までお気軽に!
※書店では販売していません。